

鑑賞・発表

地域の資源を生かし、つなげるバリアフリーコンサート
障害のある子どもたちの合唱団も活躍

「誰でもコンサート～Over The Border～」ほか

和光市民文化センター

塚田 美穂 公益財団法人和光市文化振興公社 和光市民文化センター 事業係長

令和元年より毎年、障害のある子どもたちを中心とした合唱団がオープニングアクトを務めるバリアフリーコンサート「誰でもコンサート」を開催。対象は「誰でも」で、乳幼児連れの親子から、障害のある方、高齢者まで、幅広い層が来場する。支援内容や鑑賞ルールは、参加者・来場者の声を聞いて変更・改善を重ねてきた。コンサートの出演者には和光市在住・在勤の若手アーティストを起用し、子どもたちと交流を図りやすくするなど、地域に密着したかたちで活動を展開している。合唱団は他施設でのイベント出演の機会も増えており、障害のある子どもたちの社会参加の場が広がっている。

●事業の目的・位置付け

障害者や高齢者、未就学児など「誰でも」が垣根を越えて、一緒に音楽を聴く時間を共有することにより、共生社会における相互理解やコミュニケーションを深めるきっかけとすると同時に、さまざまな垣根を越えた共生社会実現のための事業となることを目指している。和光市民文化センターは当該事業を「文化芸術の社会的包摂機能」を果たすための手段の一つと位置付けている。

●事業を始めたきっかけ

平成11年から文化芸術にアクセスしにくい層へのアウトリーチ等のインクルーシブ事業を行っており、その対象を広げていこうと考えていた頃、文化芸術推進基本計画が閣議決定し（平成30年3月）、基本方針に掲げられた「文化芸術の社会包摂機能」を地域で果たしていく手段として、インクルーシブな公演の実施の検討を始めた。また、放課後デイサービスなどの施設を複数見学する機会があり、利用者に歌の好きな子どもが多くいることや、歌の発表会を行っている施設があることを知った。これらのタイミングが重なり、障害のある子どもたちがホールで歌を発表する機会をつくれなかと、センター長や放課後デイサービスの施設長と相談を始め、令和元年、「放課後デイサービス白子ほのぼの」を母体に「白子ほのぼの合唱団」を結成。他施設の子どもや卒業生も受け入れながら、地域サークルのような形で活動が始まった。



誰でもコンサート Go for 2020（第1回目）のオープニングアクト

同年の第1回「誰でもコンサート」では、合唱団がオープニングアクトとして登場。本編では地元ゆかりのアーティストに出演をしてもらい、アンコール曲で再び合唱団に参加してもらっている。

●事業の変遷

翌年度も同事業を計画する中で、楽器演奏経験がある保護者やセンターの職員による合唱団の「軽音部」が結成された。令和3年度には、開催時期は子どもたちの学校行事との兼ね合いを考慮し、毎年6月最終土曜日に開催する定期公演とすることを決定、その公演を目標に1年間の活動を進めていくことにした。

コンサートは、和光市在住・在勤など、市にゆかりのある若手アーティストに、今後も子どもたちと交流できることを前提で出演を依頼。出演者はコンサートの構成により異なるが、出演者のうち1～2人には翌年も出演してもらい、1年後に子どもたちが「知っている人とまた会えた」と安心できる環境をつくることにした。活動が継続されるにつれ、合唱団は他館での国際交流コンサートや、駅前イベントなどに出演する機会が増えている。また、合唱団や軽音部には、健常の子どもたちや高校生・大学生がボランティアで参加するようにもなった。毎年参加者は流動的であるが、口コミで参加者の輪が広がっている。

合唱団・軽音部の日常の練習は放課後デイサービスや各人が行い、公演が近づいたら和光市民文化センターの企画展示室を練習場所として提供している。また、センターでは障害者対象のダンスワークショップを行う埼玉県助成制度を紹介し、申請サポートやワークショップ会場の貸出しなどの支援も行っている。



誰でもコンサート 2024 ～ Over the Border ～ の様子



コンサートのアンコールには合唱団も参加

●事業を行う上での工夫

- ・多くの方が来場しやすいよう、公演時間はアンコールを含めて45～50分とし、入場料金も安価な設定としている。また、介助者や2歳以下を無料としている。
- ・座席は自由席とし、気兼ねなく落ち着ける席を選べるようにしている。気分転換や休憩のための出入りも自由。
- ・車椅子スペースを拡張し、ストレッチャーや電動の大型車椅子でも入場できるスペースを設けた。
- ・場内の明るさに配慮し、ホール客席内の照明を暗くしないようにしている。
- ・音については音量だけではなく、急に大きな音を出さない等にも注意する。また、完全な静寂を来場者に求めないよう理解を促している。
- ・授乳室やオムツ交換スペースを設営し、男性用トイレにもサニタリーボックスを設置。
- ・コミュニケーション支援ボードや筆談等による対応を随時行うほか、職員から積極的に声かけを行

い、お手伝いが必要なときや不安があるときは、近くの職員にお気軽に声かけいただけるよう対応している。

・コンサートやイベントで演奏する曲は子どもたちが決めるなど、自主性を持って活動できるようにしている。

ルールや支援内容は、参加者へのヒアリングや来場者の様子などを通して変更を行ってきた。建物が古く、ハード面でのバリアフリー対応が不十分であるため、ソフト面で対応できることを工夫している。また、事業予算が乏しい中で、コストのかかる装置等を導入するのではなく、地域にある資源を活用しながら工夫を重ねている。

●研修

窓口スタッフを対象に接遇研修を実施。火災発生時の視覚障害者の避難誘導、聴覚障害者のための文字カード作成などを学ぶ。研修を受けたスタッフは、他のスタッフにも内容を共有している。

●事業担当者・施設・参加者の変化

【事業担当者・施設】

当初は障害者が利用・参加しやすくするための取組等に詳しい職員がいたわけではなく、事業を継続する中で、活動参加者や公演来場者に声をかけて聞き取りを行い、どのような配慮があるとよいのかを把握し、希望された配慮等を実現していくことを通してノウハウを蓄積していった。職員の理解には多少の温度差はあるが、継続するうちに「当館はこのような事業を実施する施設である」という認識が培われてきた。この事業が始まり外部との交流が増えたことで、日々の業務に行き詰まりを感じていた福祉施設職員が活力を取り戻した例もある。

【参加者】

軽音部のメンバーは、子どもたちの保護者・支援者から、事業の主要メンバーへと変化。また、コンサート出演者に和光市在住・在勤アーティストを起用することで、子どもたちへの手厚い協力が可能となり、交流を深める機会が増えている。

子どもたちについては、毎年、大ホールでたくさんの人の前で公演をし、拍手を受けるといった特別な機会をもつことでモチベーションが向上。社会との関わりを持つことで自己肯定感が向上し、自立心・自尊心も育まれている。保護者にとっても、活動は子どもの成長を如実に感じられる場となっている。

●事業についての感想・気づき

芸術活動や社会活動への参加の意欲がある人でも、現状ではあまり実際の活動参加に結びついていない。そのような場合、動機づけをこちらで行うことで、そういった人々を巻き込むことができる。たとえば、「こういうことをしてくれる人はいないか」「こういうことに困っている」などのことを周囲に積極的に発信していると、助けてくれる人が現れ、新たな参加者となる例が多い。

●地域との連携による事業

地元団体の会合等に出席して情報収集を図るとともに、相談にのるなど信頼関係を築いているほか、市民の芸術活動に対して補助金の情報提供や申請の支援、他団体と個人の紹介・マッチングを行うなど、地元の様々な団体と連携し、地域の文化、芸術活動のコーディネート機関としての役割を果たしている。職員は少人数でありながらも、以下のように、地域との関わりに基づいた多様な事業が実施されている。

・学校へのアウトリーチ：対象は市内全ての小・中学校（小学校 9 校、中学校 3 校）及び、高校 2 校。

令和4年度からは中学校の支援学級へのアウトリーチを試験的に開始し、令和6年度から本格化させた。アウトリーチでは、ワークショップと参加型コンサートを1時間ずつ実施している。

- ・日韓交流コンサート：障害のあるアーティストを含む日韓の音楽アーティストが一堂に会したコンサートに合唱団が出演（於：彩の国さいたま芸術劇場小ホール）。

- ・陸上自衛隊朝霞駐屯地の音楽隊と連携し、市内の小中高校の吹奏楽団を対象とした音楽クリニックを実施。年1回、学校の吹奏楽団と一緒にニューイヤーコンサートも開催している。

- ・近隣の音楽大学や、大学の児童教育学科と連携し、大学生によるコンサートの企画から実施までをサポートするかたちで若手人材を育成。その大学の教授をコンサートのソリストとして招聘することもある。

●事業の課題と今後の展開

継続していくために経費を抑え、事業収支がマイナスにならないように努力している。助成金を得られなくても毎年実施できるようにするためにも、事業のさらなる周知と、収益の増加を図っていく必要がある。

合唱団については、今後は福祉施設への訪問コンサートやイベント出演等、多様な場での交流や発表を増やすことを検討している。また、特別支援学校と連携し、知的障害のある子どもたちの体験学習の一環として、コンサートチラシの折り込みや、児童センターでのチラシ配布などの社会活動の実施も計画中である。活動のお礼として生徒をコンサートに招待し、コンサートを知ってもらい、文化芸術に触れる機会につなげていきたい。

【「誰でもコンサート～Over The Border～」事業データ】

開始：令和元年度

入場料：一般1,200円、小学生以下800円、2歳以下無料。障害者手帳の提示で介助者1名無料（令和5年度）

補助金等：文化庁 障害者等による文化芸術活動推進事業（令和4年度）、公文協アートキャラバン事業（令和5年度）

後援：和光市教育委員会、社会福祉法人和光市社会福祉協議会（予定）

外部連携：白子ほのぼの合唱団&軽音部、みるきいらんど音楽教室

事業体制：事業系のスタッフ4名、フロントスタッフ4名（非常勤を含む）

広報：館の催し物案内やホームページ、和光市駅デジタルサイネージ、市内掲示板へのチラシ掲出、近隣幼稚園・保育園・市内小学校へのチラシ配布

【実施者基本情報】

所在地：和光市民文化センター

〒351-0106 埼玉県和光市広沢1-5 TEL：048-468-7771

設置者：和光市

開館：1993年4月

管理者：公益財団法人和光市文化振興公社

規模：大ホール（1,286席）、小ホール（229席）、展示ホール、企画展示室、練習室、リハーサル室、会議室

施設の特徴：音楽に適した音響の大ホール、多目的に使える小ホール、展示室等を備えた複合文化施設。インクルーシブ事業のほか、「マチナカコンサート」と題した出張コンサートや、公立学校へのアウトリーチ、自衛隊の音楽隊や近隣大学、NPOとのコラボレーションなど、地域に根ざした多様な事業を展開している。

ホームページ：<https://www.sunazalea.or.jp>



写真提供：公益財団法人和光市文化振興公社